

ありま りゅう
有馬 龍さん

株式会社
竹中土木

PROFILE

福島県生まれ。日本大学工学部土木工学科を卒業。2021年、株式会社竹中土木へ入社。趣味はゴルフなど。



大阪・関西万博の建設現場
その日常業務、やりがいや



にし お み さと
西尾 実里さん

大成建設
株式会社

PROFILE

大阪府生まれ。武庫川女子大学大学院建築学研究所を卒業。2022年、大成建設株式会社へ入社。趣味は旅行など。

で活躍する若手の精鋭たち。
意気込みについて聞いた。

オフロードを思わせる用地で 人とICTの力を集結し、万博開催へ!

工事中の
「大屋根リング」



担当工事の概要

発注者：公益社団法人2025年日本国際博覧会協会
工事名称：2025年日本国際博覧会 施設整備事業 PW西工区
施工場所：大阪市此花区夢洲
工期：2023年4月18日～2025年2月28日
施工者：竹中工務店・南海辰村建設・竹中土木共同企業体

3D画像やGPS図面アプリを駆使する現場

「イキのいい若い社員を頼む」。工区統括所長から依頼が入り、当現場に配属された。大阪・関西万博のシンボル「大屋根リング」の約1/3（ユニット49～87）と、B・Cパビリオン、運営施設などを建設する。この抜擢により、四国の土木現場を約1カ月で引き上げ、工期開始の4カ月前に大阪へ赴任した。主に掘削・埋め戻し・埋設配管などの土工事を管理するほか、工事動線整備、西工区内他社工事との調整などを受け持つことになる。

当初は工事の計画段階で、JV（共同企業体）のスタッフらと開始に向け調整を進めた。驚いたのは、打ち合わせに3D製作図を使ったこと。万博の会場全体に張り巡らされる埋設配管が、立体画像として可視化され、モニター上で位置や干渉を確認できる。画像をくると回したり、ズームで細部をチェックすることも可能だ。大学や、入社後の現場では使用しておらず、大規模工事の精緻な3D画像は新鮮だった。

現場に入った当初、アスファルトはおろか砕石舗装もなく、草の生えたオフロードの様相だった。まずは、仮設や通行路の整備がメイン業務となった。海際で天候が変わりやすく、強い雨が降るとダンプが水たまりで立ち往生する。様子を見に行くとき、携帯電話のGPS情報を用いた図面アプリが役に立った。完成後の建物と、自分のいる位置が携帯画面に映り、随分と助けられた。

リングの基礎工事が終わると、その上を車が通ることができるよう、土工事のチームで動線を整備した。通行ルートを考え、自分でも図面を引いたものの、「実際に見ると、現場とギャップがあり実現できない!」といった場面もあったが、舗装を早めに仕上げたことで、工事は順調に進んだ。



現場事務所で3D画像を確認

経験を積み、知見を広げて一歩ずつ未来へ

建設業界を目指したのは、小学生のころ地元・福島県で東日本大震災を経験したことがきっかけ。自宅は海から離れていたが、被災地のインフラ復旧の早さに驚き、人の生活を支える土木の仕事を目指した。北陸新幹線の関連工事や東北の厩舎造成工事の現場で研修し、滋賀県のバイパス道路工事の現場に本配属。ここでは、ユニット式のPC壁材を土留め代わりに使う工法を経験し、「新しい工法を見てドキドキしました」。

今の現場では、主に土工事や外構など土木関連分野を担当するが、建築工事にも携わることができ、知見を広げた。上司は「明るい性格で、みんなとコミュニケーションを取りながら頑張っています。建設は、ゴールが同じであっても、そこに至る正解ルートが幾通りもある仕事。経験を重ね、自分の頭で複数のルート図を描いて、選べるようになってほしい」とのこと。

何も無い広大な万博会場用地に、通行路が整備され、やがて大屋根リングが上棟した。世界の建設をリードする、日本の技術がこの会場に結集し、まもなく万博が開催される。今ここにいることを「誇らしく思います」と、人好きする笑顔を見せた。



土工事を手掛けたBパビリオン



【建設業界をめざす若者へ】

この業界へ入って痛感したのが、よい人間関係を築くことの大切さ。自分と相手、双方にとってよい方法を考えることが必要です。学生時代にゼミやクラブで多くの人と話し、身につけていきましょう。

多彩な意匠建築が各所で建設され、 想像以上に楽しい万博の現場!

建設中の大催事場
[EXPOホール]



担当工事の概要

発注者：公益社団法人2025年日本国際博覧会協会
工事名称：2025年日本国際博覧会 施設整備事業 大催事場[EXPOホール]（S造、一部RC造）
施工場所：大阪市此花区夢洲
工期：2023年12月1日～2025年2月28日
施工者：大成建設株式会社

周囲の現場からも多くを吸収する日々

大阪・関西万博の開会式をはじめ、音楽・芸能など多様な催しが開かれる大催事場の建設。配属が決まったとき、先輩・同僚から「難しく大変な現場。頑張らなくて」とハッパをかけられたが、赴任してみると「すごく楽しかった」。街で見ないような特殊な建築・構造物の工事が、予定地一帯で行われる。多様な意匠が見られ、工法など進め方も現場ごとに異なる。

仮囲い越しに隣接する現場を眺め、「今何をしていますか」「それ、いつできるんですか」と、つい尋ねてしまうことも。コミュニケーション力が高く、好奇心も旺盛。今では、他の現場所長も親しく声をかけてくれるようになった。

大学時代は設計を学び、美術館の建築や展示物、神社仏閣などを見学するのが好きだったという。大学院のとき新学舎の建設を手伝い、日ごとに建物や庭が仕上がる実感、自分たちで造り上げる喜びを知って施工を志望した。

この現場でとりわけ大変なのは、顔認証や車両登録など、協力会社に対する入場案内業務。例えば取材日の入場者は99人を数え、中には顔認証登録に不慣れな作業員もいる。何より、外来者には入場経路が分かりづらい。新規入場時に、駐車場や手続き方法をしっかり伝え、職長に協力をあおぐのがコツとのこと。上司は「西尾に話を通さないと、協力会社は現場に入れない。他社からのクレームもなく、立派なもの」と太鼓判を押した。

会場には4つの工区があり、それぞれ調整会議が行われている。西尾さんは次席と共に、または現場を代表して出席する。会議で「今週、こんな工事をします。ここに車を停めてはいけません」と連絡事項を確認し合い、現場の朝礼などで伝える役割を任されている。



上司と共に取材に応える

自分が主軸となって現場を動かすのが夢

若手の現場監督（施工管理担当）は、朝礼・昼礼でその日の工程や注意事項を伝えたり、現場で巡視や検査、記録・撮影をして書類を作るほか、施工計画書・要領書の確認・整理、環境書類の作成などを担当する。

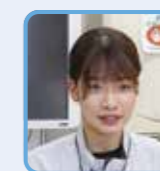
資材の種類や工種は多様で、新人の頃は「想像以上に幅広い知識が必要で大変だと思いました」。しかし、年上の男性作業員が多い現場でも遠慮せず「教えてください」と頼めば、優しく応えてくれる。前回の現場では、施工検査と引き渡しを経験し、発注者様の担当者から「おつかれさま。よく頑張ったね」と直接、ねぎらいの言葉をいただいた。

今回は、鉄骨工事の棟上げを経験した。現場で鉄骨ユニットを地組みし、クレーンで運んで屋根を形成する。現場監督、オペレーター、高所作業員、測量業者などが時間をかけ、息を合わせて、重さ約10tもある梁のトラスを吊り上げる。その様子に目をこらし、「カッコいい! こんな場面を統括的に指示し、現場を動かせるようになりたい」と強く思った。

2025年4月、このホールに主催者や各国からの来賓が集い、万博が開幕する。家族や友人も含め、大勢にお披露目できることを嬉しく感じている。



上棟後のホール内側



【建設業界をめざす若者へ】

高度な技術を持つ人々が意思疎通を図りながら一つの大きな建築を造る。その過程を日々体感できる仕事です。長期の休みも取れ、先日はフランスを一人で旅して美術館などを巡ってきました。